

「二十一世紀の仏教と私の役割り」

大正大学大学院 韓

京 洙
(韓国)

私は韓国、曹溪宗海印寺の一僧侶であります。

海印寺への入山動機は、大学時代に仏教学サークルに所属したことに起因します。そのサークルでは仏法僧の三宝に帰依し、釈迦牟尼仏の名号を唱え、修禪に励みました。ある日、サークルの先生である慧雲師より、「君は師範大学国文科を卒業して学生たちを教えることより仏法を習って修行し、解脱して、衆生を教化するほうがよいのではないか」といわれ、また、出家を勧奨されました。しかし、その時は父母や兄弟

のことを考え、私は拒否したのでした。その後、サークル活動が活発化し信仰心は益々深くなり、結局、慧雲師に出家することについて相談したのです。師は「上求菩提、下化衆生」のころをお教えくださいました。その時私は、現世紀の仏教者として、娑婆世界の迷える衆生に仏の真理を教え、坐禪と念仏を実践する道を伝えることを決意したのでした。しかし大学を卒業し、すぐ出家することは難しいことでした。というのは、韓国人男性は国防義務につかなく



ればならないからです。軍隊に入って戦争の道
を習わなくてはなりません。しかし戦争は防が
なければなりません。兵役につきながら私は、世
界平和を祈願し、人類に貢献するよう、仏様の

慈悲をもって回向することが正しいと考えたの
でありました。

私は軍の務を終えて後、父母の待つ家には戻
らずその足で海印寺に行き、出家しました。出
家の後、直ちに海印寺僧伽大学に入学して『緇
門敬訓』、大慧宗杲禅師の『書状』、高峰原妙禅
師の『禅要』、圭峰宗密禅師の『禅源諸詮集都序』、
『大乘起信論』、『金剛般若経』、『華嚴経』等を
学びました。僧伽大学を終了した時、学長であ
る宗真先生より「君は日本へ留学して新仏教を
勉強し、その後、国へ帰り、新人僧侶たちを教
えてくれないか」というお言葉をいただき、私
は喜んでそれをお受けし、その年の十二月、海
印寺より日本へ派遣されたのです。

日本に留学してみると大きな相異点がありま
した。日本は小さな島国ですが、人々は平和な
生活をしております。国民たちが熱心に働いて
自由自在に住んでいます。ある日曜日の朝、N

HK・TVを見ると、「心の時代」の番組で僧侶が説法をしておりました。また、道を歩くと看板にさえも仏教的なことを数多く見ることができました。現在の私の国の状況をみますと、ソウル市内ではどこでも教会が建っているのを見るのができます。また駅では伝道師が「神を信じなさい」と布教をし、キリスト教革命が起こったかのように見えます。それに対して特に一九八〇年頃は、政治的に仏教は迫害に近い圧迫を受けました。このような状況は単純にキリスト教思想そのものと結びつけることはできず、むしろ戦後処理で、強大国が宗教を政治的に利用したと考えることができるように思われます。最近でもベトナム戦争やイラン・イラク戦争など地球上での戦禍は絶えませんが、特にアメリカはベトナム戦争で多くの化学兵器を使用しベトナムの人々に大なる危害を与えたのでした。もちろん我国もこの戦争に参加したので

我国にも責任があると思います。反省が必要なのです。

さて、教会の活動と比較すると、仏教は保守的な思维方法を持っています。僧侶たちは進取な形を民衆に与えることはほとんどありません。これは僧侶自らの勉強不足に原因があると思われる。現在でも韓国の僧侶は山の中に入山して修行し、悟りを求めるだけというパターンが多いのです。こうした伝統的な山岳仏教は、もちろんこれからも重要ですが、一方で現代のような都市型社会においては、いわゆる都市仏教の活動がより重要になるのではないかと考えます。都市の間人は複雑な社会生活の中で宗教的な渴きを感じています。これからの仏教は山から町に下りて、布教と伝道をしなければなりません。仏教は人間の問題点と新しい方向を揭示し、人間に利益をあたえる利他の教えを伝える必要があると考えます。

日本仏教は教学的に現代社会に問題点を提示し、新しい方向をあたえています。善光寺の海外留学僧育英会もまたその一つのあらわれといえると思います。

仏教はインドから出発してアジア各国に、また世界に伝播されています。その形態は国によって相異点があり、むろん日本仏教が全く正しい姿とは思えませんが、世界各国の仏教者たちが集まって相互理解し、愛し、助けあい、世界の平和に貢献をすることが必要であると思われるます。

現在まで私は大正大学大学院において、中国唐末の禅僧、「永明延寿の思想」について研究してまいりました。私は彼の著作である『宗鏡録』『万善同帰集』『智覚禪師自行録』、二十余種を通じて、延寿において浄土教思想がどの様な形で禅の思想と融合されるにいたったかという問題を考察し、一九八六年「永明延寿の禅浄融合

思想」というテーマで大正大学において、修士論文を書きました。また一九八八年七月には、日本印度学仏教学会において「永明延寿の禅浄融合思想」と題する発表をおこない、続いて同年十月「大正大学大学院論文集」第十二号には、「永明延寿の思想」を発表しました。続いて十二月には「韓国仏教セミナー」第四号に「永明延寿の浄土思想」を発表する予定であります。

私は博士論文において、延寿によって鼓吹された禅浄融合思想が、高麗時代いかに展開されたかについて考究する計画であります。

特に、普照知訥(一一五八〜一二一〇)、太古普愚(一二二〇〜一二八二)、懶翁惠勤(一二三二〇〜一三七六)らを中心として研究し、帰国した後、学僧として東国大学校仏教大学や僧伽大学の学生を指導し、また、一般の人々の啓蒙にもつとめ、日本および韓国仏教に貢献したいと考えております。